

# NGO先進国 フランス ボランティア幕開けの 日本

## 熱い意見交換



DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo

# La Lettre



笹川日仏財団  
ニュースレター  
Vol. 3 No. 4

パリクラブのパネルディスカッションも十回を迎える。今回のタイトルは『日仏における企業とNPO/NGO現状と提言』だ(十月十四日/於日仏会館)

昨年十二月、NPO新法が施行。市民活動の拠り所として注目を集め始めたNPO、NGOを機に、一九〇一年にアソシエーション法が制定され、すでに百年の歴史を持つNGO先進国といえるフランスとの意見交換の場としての好機となったのである。

日本でNPOが注目されたのは、九五年の阪神大震災からすぎない。それまでは単なる草の根市民団体という表現にとどまっていたという日本の現状が、まず司会の日本貿易会NPO研究会座長、田形博敏氏から説明された。

では、なぜ今NPOなのか。日本側からは、実際に九年前から企業としてNPOとのパー

トナーシップを築いてきた日産自動車広報部長、島田京子さんが、その立ち上げから現在に至る経緯などを紹介した。また国民の四人に一人がなんらかのボランティア活動をしているフランスの現状、その歴史などが在日フランス商工会議所名譽会頭で、自ら「世界の医療団」でも活躍するガエル・オスタン氏によって発表された。

約二時間に渡ったディスカッションだったが、日本がこの問題でいかに立ち遅れているかを如実に表したといえよう。

「今や世界的にNPO大競争時代に突入する」と田形氏。コソボ紛争の際、避難民の身分証明のためのソフトを開発し、コンピュータを提供することで、避難民救済の一助となった欧米各国の試みを紹介。いずれ国が復興すれば、優先的にそのコンピュータ会社の実権を握るだろうこと。また、このアイデアと実践が、一社員から

始まったという国際レベルの動きも事例として知らされた。

それを受けてか、日本では阪神大震災の折、ボランティア元年と言われたが、「その活動の動機こそが企業にも個人にも求められる」との意見が聞かれた。またNPOは、現在雇用対策の一貫としても注目を浴びているが、それ以前に「活動することで、相手だけでなく自分自身のためになる」という意識変革の風土づくりが先決だという意見交換もなされた。

そして最後のオスタン氏の一言が、今回のある一つの共通項として出席者各位の胸に刻まれたようである。「企業は利益をあげながら善を行なう」

それは、そのまま個人にも当てはめることができるとオスタン氏は言う。

NaO=Non Profit Organization / 財団非営利組織  
NGO=Non Government Organization / 財団非政府組織



当財団の日仏新聞記者交流事業の一貫としてフランス・ポルドー地方の新聞社シュッドウエスト社の記者ジャン・ポール・タイヤールダスさん(49)が、八月二十八日に来日。山梨県甲府市にある山梨日日新聞を訪れ、約一カ月間滞在。九月半ばの一週間は観光で京都、倉敷、広島などを巡ったが、それ以外の三週間で県内全三七カ所の取材を勢力的にこなした。例年にならない日本の猛暑には辟易した様子だったが、帰国前日、東京でその感想を伺った。

フランスの新聞社では、二人に一人が女性

教授の答は、彼にとつて日本人を知るある一つの視点となったのだらう。それ以降は、「日本人の考えは変わる可能性があると思うか」といった現実性を帯びた質問が加わっていった。

ジャン・ポール・タイヤールダスさんの来日は今回で三度目。これまでの二回とも記者としての訪問だったが、観光名所の紹介記事を書くなどの仕事が主で日本人と触れ合う機会はほとんどなく、一カ月に渡る長期滞在も初めてだった。

しかし帰国前の彼は、そんな疲れを一切感じさせず、最後の夜は銀座を満喫したいとも言いたげな好奇心に溢れていた。そこで、今回のこの膨大な取材の中で最も

用意した中で最も聞きかかった一語だったのかもしれない。それに対して教授はこう答えたのである。「国際化の波が国の内外で激しく押し寄せてきているために、日本

人同士の約束事が通用しづらくなる環境が生まれてきた。となれば当然のこととして、日本人も従来の考え方を変化せざるをえないのは間違いない」

実際問題、女性の社会進出一つとっても、招待された一般家庭では、どこも女性がいがいしく主婦として働き、「男性には天国でも」、女性が

# 日本人の素顔に

## 初めて触れた

歴史的、経済的に日本人が異文化をどのように取り入れてきたかが中心だ。取材対象者は県内の企業家、職人、養蚕農家、官公庁。または大学教授とあらゆる職種に及び、来日三度目にして、初めて日本人を肌で知った体験となったのである。

印象に残るものは何だったのだろうか。話の糸口を、山梨大学教育人間科学部倫理学科免取慎一郎教授に見出した。

それは取材前半だったという。日本が経済的に世界でトップの座に躍り出たことで、これまでの外国に学ぶ立場から、学ばれる立場に移った今、日本人の考え方は変わるだろうか。価値観の大きな変動を余儀なくされている国際社会を念頭にしたこの質問は、彼が

「西洋では、ほとんどの女性が仕事を持っているため、社会も変化せざるを得ませんが、甲府は地方都市ということもあってか、古いしきたりを守る伝統が着実にまだ息づいていることを実感しました」



またバブル後の経済危機を、それぞれの企業がどう乗り越えてきたかは、同じ危機感を持つフランス人としては是非取材したいところ。宝飾、衣料、食料品などの企業現場を訪問、経営者にも意見を直接聞くことができたのである。

しかし、多くが昔から変わらぬ堅実経営を推進していたために、バブル期の影響をさほど受けていなかったのである。こうして地方都市の持つ保守性の強さを現実として知っていった。

### リニアモーターカーの建築費をどう捻出するかが問題

しかし反面、人々の伝統的な暮らしの中で、世界最先端を行く革新的なリニアモーターカーの存在もある。

実験セン

ターに足を運び、時速五百キロで走行するリニアの姿を目のあたりにして、その技術力には改めて圧倒されたとか。

しかし、このリニアの実用化を考えた時、建築費をどう捻出するかは大きな問題。

「設備投資は新幹線の1・二倍との説明を受けましたが、果たしてそれで済むのかは疑問です。諸外国は

どこも五倍から六倍と予想しています。その経費は結局、切符代に跳ね返る。フランスの誇るTGVに比べてスペースは広いし、乗り心地も恐らく格段の差があるでしょう。しかし果たしてその高価な切符代を払ってまで乗る人がどれだけのものでしょうか」

実用性の低い乗り物になり兼ねない懸念を示した。

### 館内放送や有線放送の「音」に対する認識の違い

他にもワインの感想や物価の高さなどさまざまな日本を語ってくれたが、その中でも特に興味をそなわれたのが音に対する認識の違いだ。

新聞社や企業、公共施設などの館内放送。また町中や畑を歩いていてまで流れる有線放送は驚き以外のなにものでもなかったという。「それも内容といえば、野球の試合が中止になったという類のもの



山梨日日新聞 樋口記者

の。たったこれだけの情報をスピーカーを使って流す必要がどこにあるのか理解できません。情報は自ら求めるものであり、必要であれば掲示板に書けば済みます。騒音としか思えないこれらの音は、フランスでは考えられないことです」

これこそ、日本にとどまっていたと見えてくる双方の生活感の違いといえよう。

### 実物のフランス人が来たことは、思った以上に迫力がある

そして何といても、今回の取材旅行での彼の最大の収穫は、それまで持っていた日本人に対するイメージを見事なまでに覆したところだろう。

「フランスのテレビなどで繰り返し放映される日本のイメージといえば芸者、台風、投機家、東京の雑踏。日本人も、あの笑顔の裏で何を考えているかわからないというものです」

特に日本人に対するそれまでの印象は「大きな間違いだった」という。

「取材先はもちろん、新聞社の人々、また電車の車掌さんや散歩中さえ、どの人も親切で友好的この一カ月間、全く違和感がなく、自分がフランス人であることを忘れてしまったような錯覚に陥ったほどです。滞在期間を終えて甲府を去るときには、自分でも驚くほど淋しい思いにかられました」

当初は日本語を話せないための不安もかなりあったようである。山梨日日新聞で世話役となった樋口幸徳記者宅に初めて招待された際、日本のお風呂の入り方がわからず、三十分近く浸かってすっかりのぼせてしまったエピソードも、今では楽しい思い出だ。特に山梨在住の通訳、八重樫京子さんの尽力によって養蚕業を営む一家や町会議員のお宅などにも招待を

受け、まるで友人のように歓待されたことでそれまでの日本人のイメージを一気に払拭することができたのである。

山梨日日

新聞では、彼の来日がいっきがけとなり、フランス語を学びたいという人も表れた。

「彼はアポに次ぐアポで、結局我々新聞記者同士の交流を持つことができなかったのが今となっては心残り」と森本松男編集局長。

しかし、「子供は大喜び。当たり前のことですが、実物のフランス人が来たことは思った以上に迫力がありました」。公私を通して世話をした樋口さんならではの正直な一言が印象に残る。

「これは、短期間の観光旅行では知り得ない人と人との真の交流があった。この新聞記者同士の交流が、いつの日か両国の親善に大きな役に立つことを期待せずには

いられない。」

熱心に話を聞くタイヤルダス記者と通訳の八重樫さん



## A propos de nos projets...

最近の事業から

### 遠隔授業で日本語を学ぶ ボワシー・ダングラ高校の生徒・教師17名が来日



リヨンの南約50kmにあるアルデッシュ県のアノネー市は人口2万人弱の小さな町。同市のボワシー・ダングラ高校の生徒14名と引率教師3名が当財団の招きで来日。奈良日仏協会の仲介により、国際理解教育に力を入れている奈良県立高取高校で10月末から約3週間の交流が実現した。

高取高校はアメリカやオーストラリア、韓国の高校と姉妹校交流を定期的に実施しているが、フランスの高校を受け入れるのは初めて。国際理解教育部が担当となり、フランスの生徒達を一人ずつホストクラスに配属し、午前中は日本の生徒と一緒に授業を受けたり、午後は高校周辺の史跡を見学する等のプログラムが組まれた。滞在中の交流や見学の様子は地元新聞やテレビでも度々紹介され、奈良での注目度も高かったと言えよう。ボワシー高校では地域産業界の要請もあって94年に日本語の授業

を設置。週3時間リヨンからテレビ会議方式の遠隔授業が行われている。現在20名強の生徒が第3外国語として日本語を選択している。学区内で日本語を学べる高校は他にはなく、越境して通っている生徒も入る。この地域には貴重な存在だ。

今回の研修旅行には教頭先生も引率教師として来日した。学校休暇1週間を利用したとはいえ、計3週間という長期にわたって自校を離れるのはフランスでは稀だ。日本との交流に対する熱意がうかがえる。

モラン教頭は「帰国後はこの旅行の成果をレポートにまとめて教育委員会や県に提出したいと考えています。交流の実績を示すことにより、今後の継続のために公的機関の財政支援をあおぎたい」と意欲的な発言も。

一方、高取高校の姫野校長も「来年にはフランスへの生徒派遣を計画できれば」と前向きだ。近い将来相互交流に発展することを期待したい。



握手するモラン教頭と姫野校長

## A la carte

ア・ラ・カルト

### 識者が語るフランスとは 近刊書2冊より

今日本人は価値観の転換を迫られている。そんな現在フランス式考え方にヒントを得て

はどうだろうか。

『フランス主義のすゝめ』（深野紀之著／近代文芸社刊）はフランス人の行動の基となり、フラン

ス人の背骨ともいえる一本筋のおつたもの、すなわち「フランス主義」を提唱。フランスでは個人が自力で考え行動するといふ「個」が主役であり、これこそ「没個性の集団主義」

が弊害を生んでいる日本にとって、ひとつの心の良薬になると提案する。日本での会社勤務を経てフランスで研究生活を送った著者が体験した

日常的なエピソードを読むと、その本質が少しずつ形になって見えてくる。たとえば、フランスはシアヌークなど政治亡命者を受け入れる政策をとったが、これは他国はかりでなく最後には自国の利益となる。これは「実利」主義であって「利己」主義ではないという。しかもカフェでのボーイさんの主張だというのだから驚く、日本でも市民社会の議論が活発だが、一般の人々の日



常生活におけるこうした態度の積み重ねが、やがて一国の政治を動かす原動力となる。あのフランス革命も女性が政治を語り始めたのがきっかけだといふ説もある、フランスならではの逸話だ。

またフランスといえばパリ日本文化会館館長の磯村氏を思い浮かべない人はいないだろう。豊かな滞仏経験から書かれた『しなやかなフランス人』（毎日新聞社刊）で、生活や文化、政治など様々な角度からフランスのフランスたる所以を語る。

特に日本でのフランス報道は英米の見方を引きずっている傾向があるとの指摘は鋭い。滞米歴のある磯村氏ならではの視点である。



また人的交流でもアングロサクソン圏への偏重に疑問を投げかける。フランスとのあいだの人数各方面のネットワークはまだ不十分。しかしフランスの日本を見る目はまだ熱いとい

## Petite note

編集後記

待望の日仏ワーキングホリデーが開始18歳から30歳までの若者が対象で、最長1年までフランス滞在が可能となります。年間発給ビザ数は250と他国と比べ少ないですが、日仏交流活発化の期待大です。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

## La Lettre

1999年12月発行 Vol. 3 No. 4  
 発行人：富永 重厚  
 編集人：関 晃典  
 発行：笹川日仏財団  
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12  
 TEL：03 (3769) 6252  
 FAX：03 (3769) 2090  
 E-mail：matsugam@spf.or.jp  
 http://www.spf.org/ffjs/

### プロジェクト・カレンダー 2000年1月～3月

『フランス現代演劇の一年』  
 同実行委員会／於東京  
 2月4、5日（於シアターラム）  
 フランス現代戯曲  
 『私は家の中で雨が来るのを待っていた』  
 ドラマリーディング

2月5、6日（於シアターラム）  
 日仏現代演劇シンポジウム  
 『フランス現代戯曲の可能性について』（仮題）

2月9～13日（於シアターラム）  
 2月16、17日（於伊丹Aホール）  
 フランス現代ダンス  
 『ヴォイツェック』  
 （ヨセフ・ナジ構成・振付）公演

『パリ市立シアトレ劇場  
 研修オーディション』  
 2月11、13、14日  
 日本人若手声楽家、  
 コレベティウアのバリ滞任研修、  
 シヤトレ劇場・笹川日仏財団／  
 於大阪・東京